

特別展『ラヴデー収容所からの手紙』をふりかえって

津田 睦美

本稿では、知られざるニューカレドニア日本人移民の戦前戦後を紹介した、国際平和ミュージアムの特別展『ラヴデー収容所からの手紙』をふりかえる。太平洋戦争勃発で敵性外国人として国外追放された日本人の父親への、現地に残された混血の子供（二世）が抱く追慕をテーマに、視聴覚芸術の手法で展示をくみため、戦争の功罪を問う。あわせて、平和教育におけるアートの可能性をミュージアムが実施したアンケートから考察する。

はじめに

2006年8月、「FEU NOS PERES ニューカレドニアの日系人」展がニューカレドニアの首都ヌメアにあるチバウ文化センターで開催された。タイトル「FEU NOS PERES」は、フランス語で「私達の亡き父」という意味であり、タイトルに象徴されるように、この展覧会のテーマは太平洋戦争勃発を機に生き別れになった日本人の父親に対する、現地に残された混血の日系二世が抱く追慕である。

ヌメアで約24000人を動員した本展は、2007年から日本で、JICA横浜 海外移住資料館を皮切りに、福岡、鶴岡、京都、広島、沖縄の六ヶ所を巡回した⁽²⁾。

日本での展覧会開催は、日系人、特に二世にとって、自分達の存在が父の祖国日本で紹介される特別な機会となった。

各地での展覧会のオープニングにあわせて、のべ90名の日系人と関係者がニューカレドニアから来日した。日系人のほとんどが、どんなふうに分が日本で受け入れられるかという期待と不安を抱えての初来日だった。

幸い、展覧会は多くのマスコミにとりあげられ、それぞれの場所で日系人は暖かく迎え入れられ、日本での滞在期間を満喫することができた。

本展は、こうした日本でほとんど知られていないニューカレドニア日本人移民史の戦前戦後を、視聴覚芸術の手法で見せる試みである。

プロジェクト「FEU NOS PERES」

そもそもこの展覧会は、私が、2003年7月にチバウ文化センターが主催する芸術家の「滞在制作プログラム」に招聘されたことがきっかけである。

同年10月に、4週間の滞在成果として、現地で撮影した日系二世の肖像写真16枚と映像作品を、同時期に滞在した他のアーティストとともに、センターでの小規模なグループ展の中で発表した。しかし、この時の作品はあまりにも点数が少なく中途半端なものであり、二世が長年語りたくても語ることはできなかった切ない父親への想いを、ひとつの集団の記憶として伝えるには不十分であった。そこでもっと徹底的に調査と撮影をするために、今度はアーティストというだけではなく、展覧会そのものを企画する立場でプロジェクトとして立ち上げることにした。



「セシルとオデット（二世）」2003 © Mutsumi Tsuda

このプロジェクトの実現に向けて、チバウ文化センターとともに全面協力を約束してくれたのが、この移民史の当事者である日系人が多く所属する「ニューカレドニア日本親善協会（アミカル・ジャポネ、以後アミカル）」だ。

長く宗主国フランスの歴史だけを学んできたニューカレドニアでは、長い民族紛争の末にようやく先住民民族カナックの歴史や文化を学べるようになった。また、

混血のすすんだこの島では、あちこちから移民してきた多様な民族の歴史も、島の重要な歴史の一部として知るべきだと認識するようになってきた。

このような時代の流れにそうように、日系二世は長く封印してきた自らの記憶を語り始めた。こうして集まった個々の記憶は集団の記憶となり、不可抗力で島から追放された父親達の名誉回復の原動力となった。

もちろん全てが順風満帆であったわけではない。どこの国にもあるように、かつていろいろな立場にあった国が、ひとつの歴史認識を共有することは難しい。このプロジェクトは、自由フランスやニューカレドニア社会が、太平洋戦争勃発を機に、手のひらを返したように日本人とその家族に対して行った仕打ちや略奪行為を思い起こさせるものでもあった。それによって、日仏両国間の関係の悪化、たとえば戦後補償問題などがぶりかえすのではないかと懸念する人が現れ、何度か、本企画は大きな圧力に潰されそうになった。それでもこうしてプロジェクトを遂行できたのは、歴史にきちんと向き合おうとする勇気のある人達が、プロジェクトの意味を評価し、支援してくれたからである。

ニューカレドニアの日本人移民

ニューカレドニアに初めて日本人がニッケル鉱山の露天掘り鉱夫として旅立ったのは1892年である。2008年に百周年を迎えるブラジル移民より、16年前のことである。

それから1919年までに、ニッケル鉱山での契約労働者としてニューカレドニアに渡った日本人の数は5575人である。(小林忠雄、1977、P276-277)

ニューカレドニア移民の特徴のひとつは、単身男性であることが条件だったことだ。そのため日本人女性がいず、適齢期の男性達が家庭を持つことは非常に困難だった。なかには、先住民カナンク人、フランス人、アジア・アフリカ諸国からの移民といった現地女性と所帯を持ち、子供が産まれた人もいた。しかし、それでも全日本人男性の約二割程度しか、妻ないし内縁の妻を持つことはできなかった。

1941年、太平洋戦争が勃発すると、自由フランスは敵性外国人となった在留日本人を全員逮捕し、一部をのぞく1241人をオーストラリアの強制収容所に移送した。この時、家族を島に残し単身男性となった者は、ハイカラヴデーの収容所に抑留された。

こうして、日本人の父親と生き別れになり、島にとり残された混血の日系二世は、父親の財産(土地・家屋など)を没収された貧困と、日本人の血をひくという

だけで差別の対象となった屈辱を味わうことになる。

辛酸を舐めた時代を経て、ようやく父の記憶を語り出した二世はすでに65-95歳である。積年の父親への思慕を抱き続ける彼らの多くが、今もその後の父親の消息を知らないままだ。

立命館国際平和ミュージアムでの展示

日本で四会場目となった立命館大学国際平和ミュージアム(以下、ミュージアム)について、そのホームページの冒頭で安斎育郎館長は、「平和をつくるために自分に何ができるかを考えて頂くための空間である」と述べている。

「戦争の悲惨さ」を知ることで、我々は「平和の尊さ」を認識する。私は、そういう意味でこの特別展を、どのようにミュージアムの常設展に関連づけることができるか、構想を練った。史実をただ羅列するだけではない、新鮮なアプローチを試みたいと思った。

こうして企画した『ラヴデー収容所からの手紙』展は、島から追放された日本人移民とその家族が体験した別離の物語を主軸とすることにした。そこで、オーストラリアの強制収容所に抑留された日本人・比嘉伝三と、現地に残された妻ローラの間⁽³⁾に交わされた手紙を初公開することにした。

会場となった中野記念ホールは、もともと美術展用のスペースではないので、写真展示に適した壁がなかった。そこで大きな白い壁を三つ作ってもらい、中央に配置した。奥のスペースは、映像作品を上映するために暗幕で区切った。

展示したものは、写真作品、写真資料、スライドショー、映像作品、史料、モノで、どれも大きさ、性質がかなり異なった。それらを、壁、展示ケース、仮設パーティション⁽⁴⁾を使って並べた。

私が集めた資料や、写真作品を全て見せることは不可能ではあったが、京都展はそれでも国内では最も大きな規模のものになった。



会場風景 撮影：大森貴生

関連企画の多様性とその効果

少しでも多くの方にこの移民史を知ってもらうために、私は、移民史を多角的に見せることを最初の展覧会から一貫して重要視した。いろいろな専門分野、世代から参加してもらうことで、テーマの捉え方やアプローチがより多様になるのが理想的だと考えるからだ。

京都では、ミュージアムが会期中2回主催したコンサートとギャラリートーク⁽⁴⁾にくわえて、立命館大学国際言語文化研究所がシンポジウム⁽⁵⁾を主催した。

前者は、学生や一般の方が多く集まった。特に、会場内を流れる『Pardis perdu (失われた楽園)』を、rimacona(リマコナ)の柳本奈都子と原摩利彦がライブで演奏すると、世代を越え、多くの人聞き入った。



rimaconaのコンサート風景 撮影：大森貴生

後者は、立命館大学米山裕教授がコーディネーターを担当したシンポジウム『太平洋における日本人移民の体験』で、オーストラリア日系人強制収容研究の第一人者、永田由利子豪クイーンズランド大学准教授を招聘した。日本の移民研究において太平洋地域はまだ未知の分野である。この機会に多くの専門家に知ってもらい、新たな研究を誘引したいと思った。

他にも、立命館大学の一年生対象に特別講義をする機会もいただき、その後展覧会鑑賞をした学生達がレポートを提出した。学生のほとんどがこの時初めてミュージアムを訪れている。

アンケートの結果から

ここで、ミュージアムが実施した来場者へのアンケートの回答から、観客がどのように展覧会を鑑賞したかを紹介する。

回収されたアンケート230枚の内訳は、男性99人、女性127人、無回答4人で、回答率は入場者の2.4%である。

年齢層は、10代が86人、20代が85人、30代が10人、40代が15人、50代が8人、60代が10人、70代以上が12人、回答なし4人となっている。

満足度は、満足が148人(71.5%)、普通が55人(26.6%)、不満が4人(1.9%)で、展示方法は、良いが182人(94.8%)、悪いが10人(5.2%)という結果であった。

次に、アンケートに自由に書かれた感想を一部紹介する。なるべく原文のままにしてあるが、紙面上、重複する内容は省略した。また個人名や展示作品などは、わかりやすく書き足し、キーワードごとにまとめてみた。

「戦争」

○戦争の傷跡はいたるところに残るんだなぁと思った。戦死、被爆以外にもこのようなかたちでの悲劇が存在することを恥ずかしながら初めて知りました。

(京都・学生・10代・女性)

○戦争で辛かったのは日本国内にいた者だけではない。遠い国にいても日本人、または日本人の血が流れているだけで辛い思いをした人々がいたという事実を改めて感じる事ができた。

(京都・学生・10代・女性)

○ニューカレドニアの日系人のことについて僕は何も知らなかった。悲惨な過去は忘れ去られていくように見えているが、実は当事者の一番深いところずっと根づいている。人が生きていた証を見ることは映画に似ていると思った。知ったのは悲惨な過去だったけど、今を生きる僕はその過去をどうこう出来ないけど、今僕がいる世界で生きる元気をもらった。

(京都・学生・10代・男性)

○改めて戦争の悲惨さが分かった。現地に残された妻ローラの手紙に「戦争が憎い」という言葉があった。愛する夫への手紙には、その気持ちとともに、戦争によって離れ離れになった夫への愛を感じた。何の罪もない人々が、戦争によって、こういった悲しい歴史に縛られてきた。この写真展を見て、21世紀は、平和な時代であってほしいと、改めて切に願う。

(京都・学生・20代・男性)

○戦争における国外の日本人の影響に焦点を絞った展覧会というのはありそうでないテーマだと感じた。国内において戦争の話は様々なところで語り継がれてきている。しかし、それだけでは戦争とはいったいどのようなものであるのかということを知るには

不十分である。あの戦争において国外に移民した人々が経験した悲劇、そして現在これほどまでにグローバル化が進化した世界において戦争は何をもたらすか？ただ、何故ニューカレドニアなのだろうか、他にももっと見るべきところがあるんじゃないのかという思いは少しした。

(京都・学生・20代・男性)

- ニューカレドニアには観光で行ったことがあります。あの美しい海に囲まれたリゾート地にこのような歴史があったことは知りませんでした。戦争は本当にいろいろな場所に傷跡を残しているのだと改めて考えさせられました。

(大阪・学生・20代・女性)

- 戦前、戦中の日系移民の知らなかった事実を見ることができ良かった。彼らは又戦争によって人生を変えられてしまった人達だ。でも子供達はたくましく生きてきた、それが印象に残った。

(愛知・地方公務員・40代・男性)

- ハワイ、北米、南米への移民は知られているが、今展示会のように、知られざる日本人移民に光をあてることは意義のあることだと思います。戦争がいかにかに家族にむごい仕打ちをしいるか考えさせられる催しである。ある意味で定義を通して戦争を考えるいい企画です。

(福岡・会社員・50代・男性)

- ニューカレドニアの移民についてはじめて知りました。戦争がいつも多くの人々の運命を狂わせることを改めて認識しました。しかし、2世3世の人々が思い出を大切にしておられることに感動しました。

(京都・教育関係者・60代・女性)

- たぶん、資料蒐集が大変だっただろうと思います。私達は、満州やブラジルの移民とその結果の悲劇は見たり聞いたりしますが、他にも日本人が移民した地はあったのですね。その地で希望を持ってよく働いた人たちが、戦争によって運命を狂わされ、囚人に転落し、家族は離散したとキャプションにありました。でも写真の人たちは、二代前の出来事をあまり感じないほど元気に見えます。三代目の人となると、悲惨な記憶はもう殆ど忘れられているように思われました。その意味で、風化寸前の時期に私たちがこの記録を見せていただけた「ニューカレドニアの日系人」という展示会は、資料数の多寓にかかわらず、とても必要な催しだと思います。

(京都・70代・女性)

「家族」

- 突然の家族との別れ、残す者も残される者も、言葉にしつくせない苦しみや悲しみがある中、希望を失わず生きてこられた人々の強さを、作品を通じてひしひしと感ずることができました。今、家族の絆が問われる現代において、この作品展を見て考えさせられることはたくさんあると思います。父親・祖父のルーツを探ることは自分を探ることに繋がります。私もすでに祖父・父を亡くしていますが、改めて私を創ってくれた人々の思いを受けとめ、日々大切に過ごしていきたいと思っています。

(京都・会社員・30代・女性)

「日本」、「日本人」

- 私にも海外経験があります。彼らのように過酷ではなく、もちろん自ら望んだものでした。しかし、故郷日本を想ったのはあれが初めてでした。どれほど収容された人々が日本を想ったことだろう。そして家族との幸せな生活を奪われ、失った二度目の故郷を想いながら亡くなった人々はどんな気持ちだったのだろう。どんなに日本に帰りたかっただろう…。色々なことを想うと涙が出ました。

(京都・学生・20代・女性)

- 「日本」について、「日本人」について考えさせられることが多かったです。過去の歴史で起こったこと(日本のアジア侵略・戦争・原爆など)は自分には関係ないのではなく、自分のアイデンティティの一部なんだと思う。それが自分が日本人であるということだと思う。たとえ、前の世代の時に起こったことであるとしても。

(京都・学生・20代・男性)

「写真」、「音楽」、「映像」

- 展示の中ずっとかかっている『Paradis perdu』の曲と各写真、そして展示物とがからみあってすごく感情が入り込みました。まるで別世界にいるような。時を忘れてその空間にいた気がします。特に映像作品『馬の蹄鉄』の最後に流れる、聞き覚えのある「君が代」すごく印象的で涙が流れ出そうになりました。すごく勉強になりました。ありがとうございます。

(奈良・学生・10代・女性)

- 音楽と写真の力強さにひかれて、なぜだか涙が止まらなくなりました。ニューカレドニアは観光地として有名な場所だけど、別の顔を持つということを知っている人はどれだけいるのでしょうか？原住民

との間の子供に対する差別の目が存在すること、日本の親族を探す女性がいること、同じ人としてそして日本人であるという血を持つものとして、もっとこのことを知っていきたくて強く思いました。

(滋賀・学生・20代・女性)

- 学校の授業で移民について学んでいます。この特別展を見ることで、移民の人々の苦勞がより実感として伝わってきました。特に印象深かったのは2世の人々の父親に対する追慕をテーマにした歌でした。当時子供だった人たちが今も「なぜ父親は突然連れて行かれたのか？」という疑問を持っているということに、当時の辛い気持ちが伺えました。戦争というものに対して考えさせられました。良かったです、ありがとうございました。

(滋賀・学生・20代・男性)

- 父親達の写真の前で涙が出ました。まるで「愛していると伝えてくれ」と言われている様でした。音楽が素晴らしいかったです。

(京都市内・学生・20代・男性)

- 会場で流れる音楽が、写真展の雰囲気をよりひきだしてよかった。あと、奥から流れるおばあさんの「君が代」を歌う声が、展示を見ているときに聞こえてきて、切なさややるせなさを感じさせた。「戦争」がもたらすものに国境はないのだ、今の私たちが考えるべきことは、無限にあるのだと痛感した。現在の美しい風景も見て、今を暮らす日系人の方の幸せを願います。ぜひ、行ってみたいです。今回の展示は、やはりBGM、音楽がすごく効いていると思います。

(学生・20代・女性)

- 過去と現在とを繋ぐ写真の手法が活きている。過去を過ごした物の息吹も会場に届けられた。現在から未来へは展示を作り上げる事により為されたのでは無いか？映像作品に登場する女性(二世)が、最後「君が代」を唄い、「これしか憶えていない」と言ったのが印象に残る。彼女の中にしかない万感の念が溢れ我に乗り移る・・・。

(京都・会社員・30代・男性)

- 会場の展示が美しくリラックスして展示を楽しめた。音楽も素晴らしくドキュメンタリービデオの展示も良い内容だった。もう少し概略、要説をまとめてくれていたらわかりやすい。しかし、個々の人々をとらえた写真と展示には心をうたれた。平和ミュージアムで初めて満足した展示である。

(京都・大学院生・30代・男性)



映像作品『馬の蹄鉄』2007より © Mutsumi Tsuda

- とても良かった。スライドショーのバックに流れていた音楽もとても良く、日系人たちの暮らし方をゆっくり見つめられる感じがした。映像作品『野田さんの日記』で出てくるアーモンドの花には心がうたれた。野田さんが桜の花に似たこの花を心待ちにしていたのだろうと強く感じた。映像によって単に感傷的になるのではなく、少しでも実際に経験した人々の状況を思いやることのできたような気がする。(富山・博士課程・30代・女性)

「シンシアの親族探し(戸籍調査)」

- 移民について興味があったので来ました。多くの日系人が収容されていたという事実は知っていました。オーストラリア・カウラにある日本人墓地にも行ったことがあります。多くの写真、当時の手紙・資料で移民たちが受けてきた扱い、苦しいものだったということがとても感じられました。シンシアが曾祖父の戸籍を探す過程を紹介する展示では涙が出てきました。いくつもの「あなたの戸籍はありません」という返信ハガキの中に、丁寧に「戸籍がありました」というハガキを見つけたときには涙がとまりませんでした。シンシアの姿勢がとても素敵だなと思いました。(京都・学生・20代・女性)

- 福島県各市町村と戸籍を見つけるために交わした往復はがきが最も印象的であった。同じ「該当者なし」との返事であっても、心のこもったもの、無味乾燥なものとの差がある。この問題が現在に続く問題であり、また生身の人間の問題であることを感じさせる。単なる過去の歴史としてみる者と隔たりを作らない工夫がなされている一例である。

(大学院生・20代・男性)



会場風景 右から、シンシア（日系四世）の肖像写真、福島県下の戸籍担当者から届いた返信葉書、シンシアが日本の親族から受け取った曾祖父の写真
撮影：大森貴生

「手紙」

○展内で流れている音楽が、展示しているものを見ているうちに、心にひびいてきました。ニューカレドニアで起こっていたことを知らない私とか、生活するために本当に命を燃やしていた人たちのことを知って、このままじゃ私はだめだと感じました。一番印象に残ったのが手紙で、夫と夫の友人と妻のやりとりの中で、今の時代日本に住む私には想像できない悲しみとか、伝えたい溢れだす気持ちや言葉が伝わってきました。人がいなくなることや、争いがこんなに悲しいものを生むのだということを知りました。でも、その中でまた、懸命に生きてきた人たちの姿を見て心に温かいものを感じました。

（京都・学生・20代・女性）

その他

○入った瞬間から当時を思い出させるような雰囲気です。びっくりしたし、日系人の方や強制収容所に送還された人のことを思うと辛かったです。

（京都・学生・10代・女性）

○当時生きていた人々の生の文や生活道具が多くあって生々しく感じる事ができたと思う。

（京都・学生・20代・男性）

○津田さんが長年かけて取材してこられた歴史的事実が、当人たちと客観的な視点の両方からまとめられており戦争がもたらしたあらゆる運命を感じた。

（埼玉県・会社員・20代・女性）

○「歴史が彼らに共通する悲劇を省みるに値する数である」というダニー・ダルメラックの言葉が印象に残りました。遠いニューカレドニアにこんな歴史があったことを初めて知りました。とてもよい企画だと思います。

（京都・60代・女性）

○現地の人が市民権を与えられていなかったのはどこも同じで、ラテンアメリカでも原住民が一番低い階層として扱われている。それがまた続いていることと思ひ合わせ、植民地としての悲しさが分かる。日本人と現地の人が結婚して現地の人の立場を拒否したら、日本人でもなくフランス人でもなくニューカレドニア人でもない??（京都・70代・女性）

アンケートの記述内容を見ると、どれも丁寧に展示を見ていただいた方によるものだということがわかる。

多くの方が、戦争の功罪を問い、平和の意味を考えている。また、映像作品や手紙によって二世の生の声に触れたことや、親族探しの過程をたどったことで、よりこの史実に感情移入させるきっかけを得たようだ。

ただ悲しい史実として捉えるばかりではなく、現在を生きる二世の姿が伝わったこと、また、映像、音楽などを導入した展示の工夫にも理解していただけしたことなど、企画した者にとって嬉しい反応が多く安堵した。

一方、否定的な意見もあった。「展示物が多く、窮屈で見にくかった」「見る順番がよくわからなかった」「説明が不十分で理解できなかった」「日本との位置関係のわかる地図がほしかった」などである。

本展は見学に最低二時間はかかる。時間を十分にかけられなかった方にとっては、理解するのが難しい内容であったことは否めない。

結びにかえて

ミュージアムでこの展覧会開催を終えた今、私は平和教育におけるアートの可能性というものを改めて考えるようになった。

本展における会場内の二世の肖像写真、スライドショー、映像作品、歌は、各々がテーマにそったひとつの⁽⁶⁾アート作品として成立している。アートというと、一般にはとても不可解で馴染みのないものに聞こえるかもしれないが、実際にはアートほど巧みな方法で主題を見る側に提示できる方法はないと思う。

展示の中でも特に私がこだわったのは、「写真」と「映像」を使うことだった。

まず、日系二世の肖像写真をカラーフィルムで撮り始めたのは、様々な民族と混血している二世がどんな

外見をしているか、それを見てほしかったからだ。

戦前の古い写真は、銀塩写真のままの場合もあれば、必要に応じてスケールを変え、布や和紙にインクジェットプリントをして展示した。

二世が見せてくれる古い写真の中の父親は、すでにその子供である二世よりはるかに若かく、そこには時間が留ったやせない証拠が残っている。また、一枚の写真が唯一の遺品という人も多く、写真が氾濫する現在では想像できないような、「写真」と「記憶」を結びつける普遍の力が存在していることを感じた。

家族写真は、銀塩写真からカラー写真、デジタル写真へと世代ごとに移行している。それに、移民史が19世紀末に始まる写真史と重なっていることも興味深いことだった。

一方、映像作品を制作したのは、フランス語の「声」を聞いてほしかったからだ。それは、聞き取りを始めたばかりの私が、二世が日本語を全く話す事ができないことに驚き、フランス語で語られる日本人の父親像に違和感があった経験に基づく。戦争で離ればなれになった父と子が共通の言語を持たなかった（あるいは失った）ことが、その後の別離を決定的にしたのだと思うと無性に悲しかった。

大学という教育機関と密着したこのミュージアムの可能性は無限である。学生達が単に情報を得るだけの観客になるのではなく、彼ら自身が何かを提案し、考える場になるような施設であってほしいと願っている。

私は今後ますます「平和」を考えるアートの可能性を探求していきたいと思う。

最後になったが、2003年に初めてお目にかかって以来、ずっと私の企画に耳を傾け、特別展として受け入れて下さった安斎育郎館長に心からお礼を申し上げたい。

あわせて、ミュージアムが行ったアンケートを、拙稿を書くにあたり快く提供いただいたことにも感謝する。

(すべて敬称略)

《注》

(1) 2006年8月5日から11月8日まで、チバウ文化センター主催で開催された津田睦美の個展。フランス政府外務省太平洋基金、カナック文化局 (ADCK) の助成、ニューカレドニア政府らの協賛を得た。8月6日には、シンポジウム、演劇、コンサートなどを行った。会期中、関連企

画として在シドニー日本国総領事館主催の日本映画上映会も開催。

参照：<http://www.feu-nos-peres.org/>

(2) 実際には巡回展とはいえ、会場の規模、地域、カテゴリー、設備の違いによって展示構成がかなり変わるものであった。巡回展は以下の会場で開催された。

①『FEU NOS PERES ニューカレドニアの日系人』展、2月27日～4月1日、JICA横浜 海外移住資料館(横浜)、②『馬の蹄鉄』展、4月7日～5月7日、九州日仏学館(福岡)、③『FEU NOS PERES ニューカレドニアの日系人』展、4月12日～4月22日、鶴岡アートフォーラム(山形県・鶴岡)、④『ラヴデー収容所からの手紙』、5月12日～6月30日、立命館大学国際平和ミュージアム(京都)、⑤『FEU NOS PERES ニューカレドニアの日系人』展、11月5日～12月25日、広島県立文書館、⑥『マブイの往還』、11月12日～11月21日、琉球新報本社ギャラリー・多目的ホール(那覇)

(3) これらの手紙は、比嘉伝三と同郷出身移民である松田幸三郎の手帖(松田アキ所蔵)にフランス語で書かれていた。フランス語のできた松田が比嘉に頼まれて、ローラからの手紙を翻訳するために書き写したものと思われる。

(4) 5月26日(土)、6月9日(土)に、津田睦美によるギャラリートークと、rimaconaオリジナルコンサート『区切られた空・熊本の子守唄とともに』を開催。rimaconaは、日系二世の父親への追慕を歌った『Paradis perdu』(作詞：津田睦美)や豪タツラ収容所内にあった私設国民学校で歌われた別れの歌『Tatura song』、ニューカレドニアへの移民最多出身県である熊本県の子守唄、わらべ歌の音源を用いた作品などを演奏した。

『Paradis perdu (失われた楽園)』は、当時、成安造形大学に在学していた柳本奈都子の学外での音楽活動に注目していた津田が、rimaconaに作曲を依頼してできた。教え子とのコラボレーションは、展覧会のテーマソングとなった。

参照：『Paradis perdu』(試聴)

<http://www.myspace.com/rimacona>

<http://www.rimacona-lab.com/>

2007年5月12日(土)に開催。

(5) 第一部は、ゲストに豪タツラ収容所からの引揚者3名を迎えた座談会『豪タツラ収容所の思い出』。進行：津田睦美、コメンテーター：永田由利子

第二部は、シンポジウム『太平洋における日本人移民の体験』。報告者は、石川友紀(琉球大学名誉教授)、永田由利子、米山裕、権藤千恵(立命館大学大学院研究生)なお、このシンポジウム『太平洋における日本人移民の体験』は、その後さらに2回連続して(6月29日と7月13日)、報告者を変えて開催された。

- (6) 展示された中で、津田睦美の作品は、短編映像作品『野田さんの日記』(2006)、『馬の蹄鉄』(2007)、日系二世のポートレート写真(2003-2007) 19点、その他の写真作品12点(2003-2007)、当時日本人が店で扱っていた日用品などを撮った写真30点で構成した『渡辺商店』(2007)である。

参考文献

小林忠雄『ニューカレドニア島の日本人』、1977、カルチャー出版

島敦彦「FEU NOS PERES ニューカレドニアの日系人—立命館大学国際平和ミュージアム」、『**産経新聞**』審美のアンクル、2007年6月12日、関西夕刊

津田睦美編著『FEU NOS PERES ニューカレドニアの日系人』、2006、同展実行委員会、青幻舎発売

永田由利子『オーストラリア日系人強制収容の記録』、2002、高文研